

白河市筈内古墳群の再検討 ～横穴墓造営の変遷に関する一考察～

専門学芸員 高橋 信一

1 はじめに

古代の白河郡は、陸奥国南部の大郡として郡衙（泉崎村関和久官衙遺跡）・郡寺（白河市借宿庵寺跡）、軍団（泉崎村関和久上町遺跡）などの遺跡が確認されている。

白河市内には14遺跡（内訳は、旧白河市9・旧東村2・旧表郷村1・大信村2）の埋葬施設である横穴群が福島県遺跡地図に登録されている（註1）。他の地域と比べても、福島県内で比較的多くの横穴群が発見されている地域である。立地の傾向は、河川に面し、地域によっては東・西面もあるが、南面に分布する場合が多い。また、これらの横穴群を造営した人々の集落遺跡の発見例は少ない。

白河市筈内古墳群は、JR東北本線白河駅から約15km東方の、西白河郡東村（現在の白河市：平成17年に合併）大字上野出島字筈内に所在する。この古墳群は、国営総合開発事業母畑地区（註2）に伴う試掘調査で発見され、昭和53（1978）年5月29日から同年10月16日にかけて3,300㎡の発掘調査が行われた。調査の結果、高塚古墳4基、箱式石棺1基、横穴墓55基、土坑1基の遺構と、古墳時代後期から奈良・平安時代に属する遺物（須恵器・土師器・武器類・馬具類・装身具類等）が出土し、古代史研究上貴重な資料を得ることができた。同年度には『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』が刊行され、その後、未報告分を含めて平成8（1996）年3月には『母畑地区遺跡発掘調査報告39』が刊行された。

高塚古墳の2号墳はまほろんの野外展示「前方後円墳」（註3）のモデルになっており、横穴墓

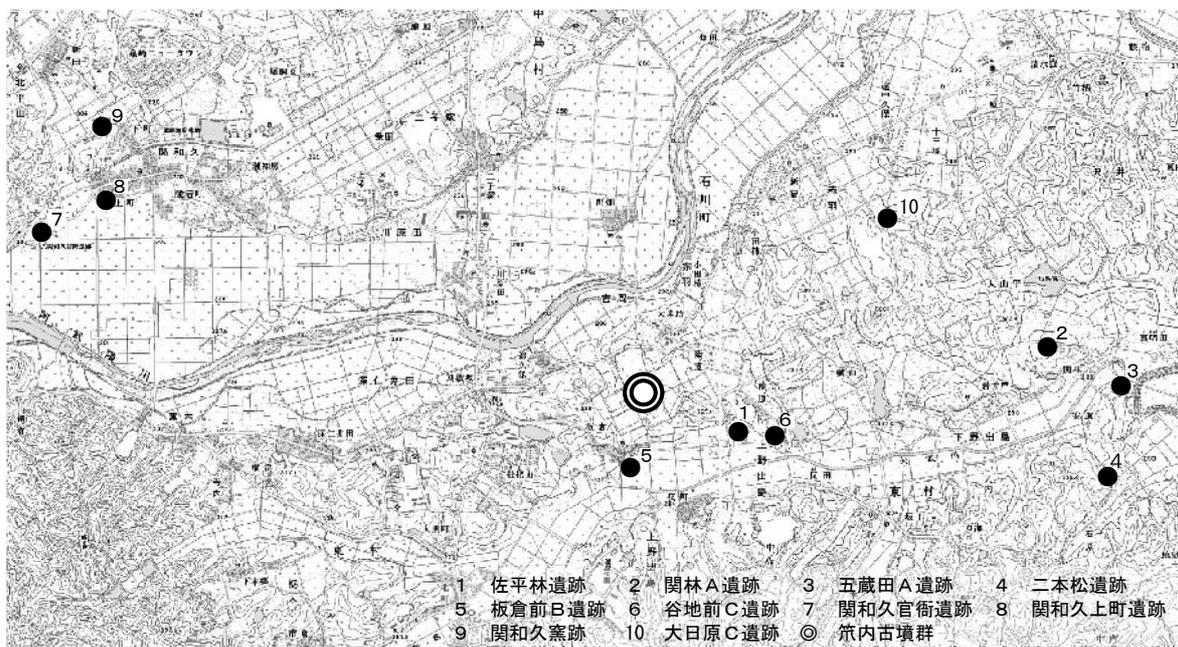


図1 遺跡の位置図



図2 白河市筑内古墳群（横穴墓）全景写真

の副葬品は保存処理が行われ、鉄刀、金銅製馬具、銅碗などが常設展に展示されている。この中でも37号横穴墓から発見された馬具は、研究復元によって復元され、まほろんの馬模型に装着されて、今にその輝きを伝えている。

本論では、先に報告した事実を基に、横穴墓のグループと造営の変遷について私論を含めて再検討し、報告書に触れられなかったことをまとめていく。

2 横穴墓の分類

検出された55基の横穴墓は、規模・形態など多種多様である。しかも、遺構の保存状態が不明瞭なものもあり、全体規模で正確な数値で計測できないものが多い。表1にはこれらを平面形・玄室形態・立面形を中心に類型化した。さらに、前庭部（墓前域）の共有や重複・配置・の共有などから、東から西にかけてA～Lのグループに分類することが可能である。これらの横穴群は、東西方向に連なる標高330m前後の丘陵に立地しており、僅かに南側に張り出す小丘陵と中央部の谷の間の直線距離で約90mの範囲に集中して発見された。また、溶結度の弱い石英安山岩質溶結凝灰岩D I層の範囲に分布することも特色の一つである。弧状に配置された横穴群は、東群と西群に分類される。東群（A～E群 図3）は1～18・51・54・55号横穴墓の21基、西群（F～L群 図8）は、19～50・52・53号横穴墓の34基にグルーピングが可能である。

また、共有する排土置場は便宜的に東から1～8号としたが、1号排土置場に付随する横穴群は確認されなかった。同じようにC・Lグループは排土置場は確認されなかった。全体規模を正確な数字で計測できない横穴墓が多いため、平面形・玄室形態・立面形を中心に類型化して、表1にまとめた。

Aグループ：1～3・12・55号横穴墓

Gグループ：25～31号横穴墓

Bグループ：4～6・51号横穴墓

Hグループ：32～34・50号横穴墓

Cグループ：7～11号横穴墓

Iグループ：35～37号横穴墓

Dグループ：13・14・54号横穴墓

Jグループ：38・39・52・53号横穴墓

Eグループ：15～18号横穴墓

Kグループ：40～44・47号横穴墓

Fグループ：19～24・49号横穴墓

Lグループ：45・46・48号横穴墓

表1 横穴墓類型分類基準

	I類	II類	III類	IV類				V類		
全体平面形				IV a	IV b	IV c	IV d	不明		
	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類	H類	I類	J類
玄室平面形									不定形	不明
	1類		2類		3類		4類		5類	
玄室立面形									不明	

報告時のA～Lグループを基に、下記の条件と表1の横穴墓類型分類基準を加え、細分すると下記の表2にまとめられる。次に、各グループの特色と変遷についてまとめる。

- (1) 横穴墓は、家族墓である。
- (2) 世代交代によって、新たに横穴墓が作られる。
- (3) 分類したグループには、中心となる玄室（家長？）がある。
- (4) 同じく玄室内の出土品が異なる。
- (5) 小横穴・副室は、改葬墓である。

3 各横穴墓の変遷

(1) 東群の横穴群 (A～Eグループの5類・20基)

東群の横穴群は、A～Eグループの5類・20基と1～4号排土置場から構成される。東側のD I層を囲むように横穴群が配置している。しかし、1号排土置場に関しては、関連する横穴群は発見されなかった。主軸方向はAグループが異なり北から西に向かい、B～Eグループはほぼ南北方向に向いている。

Aグループ：1～3・12・55号横穴墓 (東群 図3)

このグループは、本横穴群の中で最東端に位置する。他の横穴群と異なり、主軸方向が北から西に向かっている。1～3・55号横穴墓の4基から構成される。墓前域の共有や2号排土置場の土層堆積状況から、A1の1・12号横穴墓とA2の2・3・55号横穴墓に分かれる。

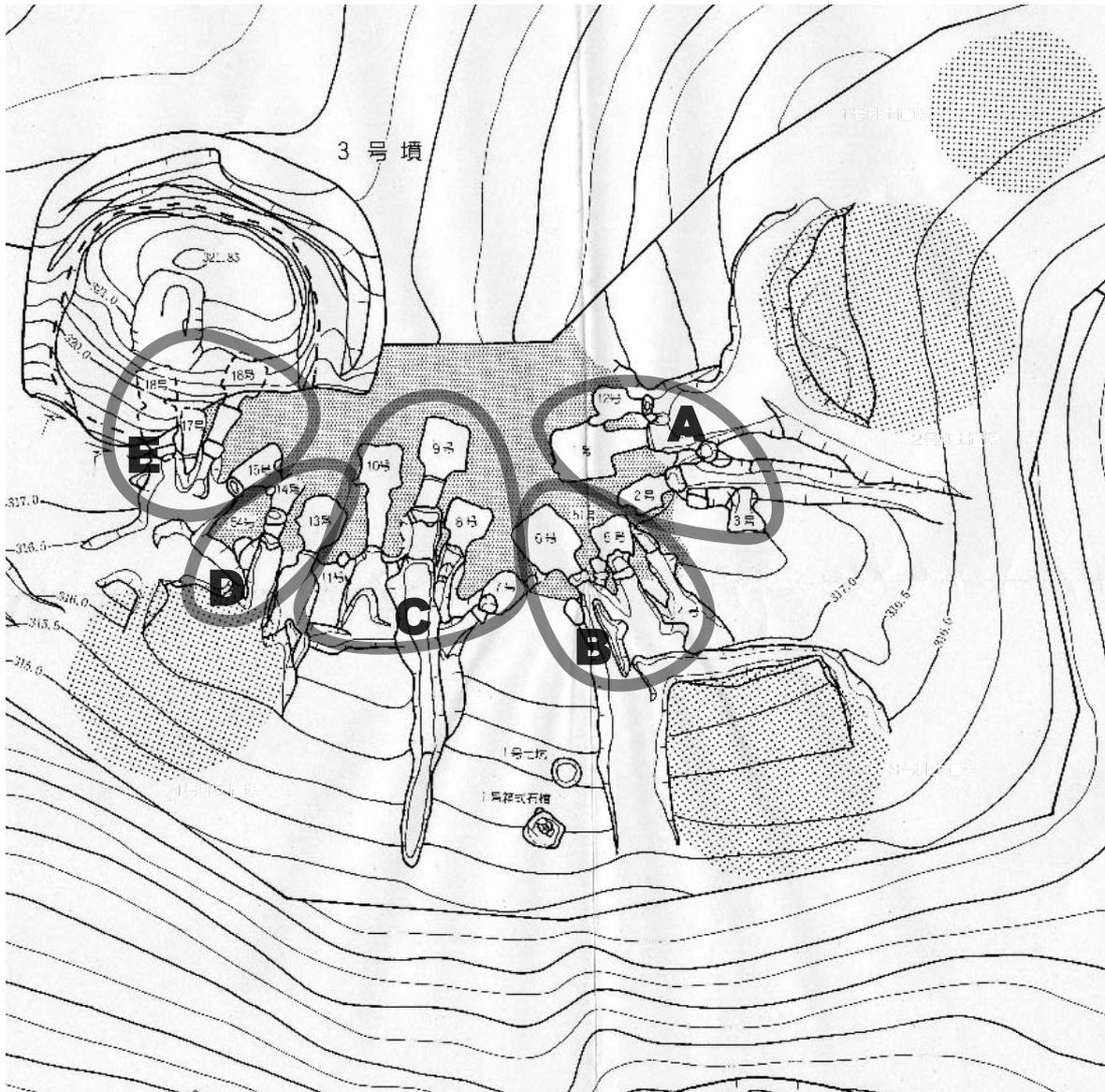


図3 東群横穴墓

配置から1・2号横穴墓が古く、3・12・55号横穴墓へと続く。3・55号は形態・規模から小横穴の改葬墓と考えられる。1号横穴墓からは、直刀・鏢・錫釧や勾玉が出土している。

新旧関係は、古期が1・2号横穴墓、次に3・12・55号横穴墓である。最低でも2～3時期に渡って使用されたものと考えられる。このグループでは、1号横穴墓の玄室に埋葬された直刀・鏢・錫釧や勾玉を考えると、Aグループでは中心的な役割を担った家族の墓と推定される。また、2号排土置場と墓前域の関係では、墓前域を避けて排土置場が設定されている。

Bグループ：4～6・51号横穴墓（東群 図3）

このグループは、B～Eグループまで主軸方向をほぼ南北方向に持つ。4～6・51号横穴墓4基から構成され、このグループの掘削土は3号排土置場となる。配置からB1の4・5号横穴墓とB2の6・51号横穴墓に分かれる。6号横穴墓からは直刀と馬具が出土している。馬具は鉄製鏡板付轡と鉄製鉸具がある。新旧関係は、4号横穴墓（古）→5号横穴墓（中）→6・51号横穴墓となる。51号横穴墓は、形態・規模から小横穴の改葬墓と考えられる。

6号横穴墓の玄室に埋葬された直刀・馬具を考えると、Bグループでは中心的な役割を担った家族の墓と推定される。3号排土置場と墓前域の関係では、墓前域を避けて排土置場が設定されている。また、Bグループの墓前域の西側には1号土坑や1号箱式石棺が隣接している。



図4 7～11号横穴墓

Cグループ：7～11号横穴墓（東群 図3・4）

7～11号横穴墓の5基から構成され、構築時の排土置場は確認されなかった。墓前域の共有などからC1の7～9号横穴墓とC2の10・11号横穴墓に分かれる。

特に、9号横穴墓は、男性1体と女性2体の人骨が出土している。新旧関係は、9号横穴墓→10・11号横穴墓→7・8号横穴墓への変遷が考えられる。11号横穴墓は、形態・規模から小横穴の改葬墓と考えられる。



図5 13～14・54号横穴墓

Dグループ：13・14・54号横穴墓（東群 図3・5）

13・14・54号横穴墓の3基から構成され、Eグループの4号排土置場を共有する。13・14号横穴墓は、墓前域を共有しており、堆積土の検討から13・14号横穴墓→54号横穴墓への変遷が考えられる。54号横穴墓は、形態・規模から小横穴の改葬墓と考えられる。

Eグループ：15～18号横穴墓（東群 図3・6）

東群の横穴群の中では、最西端に位置する。15～18号横穴墓の4基で、墓前域を共有する。またDグループと4号排土置場を共有する。軸線は北東から北西へ、扇形の配列をとる。新旧関係は、墓前域や4号排土置場の土層から、18号横穴墓→16号横穴墓→15・17号横穴墓へ



図6 15～18号横穴墓



図7 19～24・49号横穴墓

の変遷が考えられる。16～18号横穴墓からは男性・女性・性別不明を含めて、9体の人骨が出土している。

(2) 西群の横穴群 (F～Lグループ・34基)

西群の横穴群は、F～Lグループの5類・34基と5～8号排土置場から構成される。西側のD I層を囲むように東群の横穴墓と同じように扇状を呈する。

Fグループ:19～24・49号横穴墓 (西群 図7・8)

本グループ以降が、西群の横穴群である。西側のD I層を弧状に囲むように、7基の横穴墓が構築されている。5号排土置場を共有している。墓前域の共有などからF1の19～21号横穴墓とF2の22～24・49号横穴墓に分かれる。49号横穴墓は、形態・規模から小横穴の改葬墓と考えられる。21・24号横穴墓の玄室には、

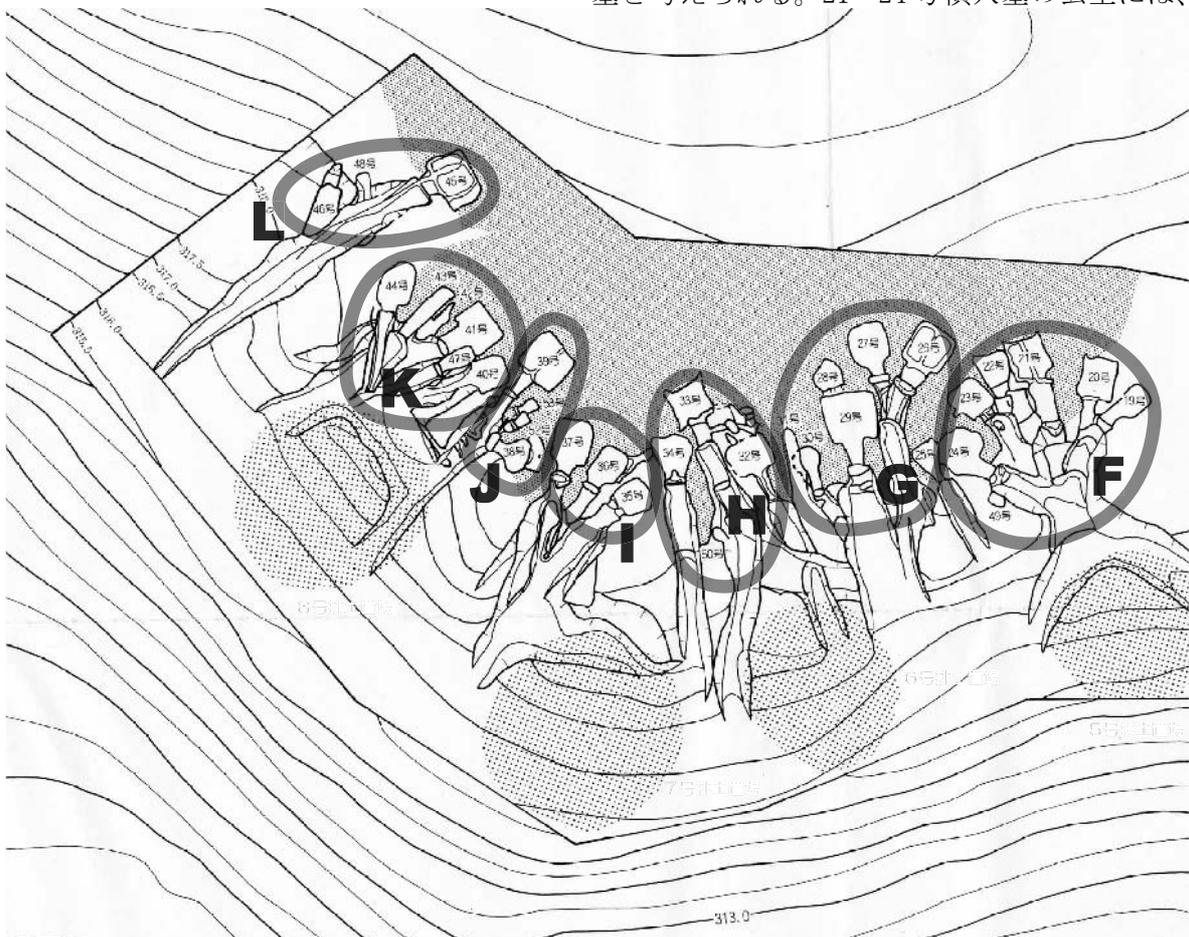


図8 西群横穴墓

造り付け有縁棺座を有する。21号横穴墓からは滑石製紡錘車が、23号横穴墓からは直刀、馬具の轡・辻金具残片・飾金具・鉸具残片が出土している。新旧関係は、F1グループは21号横穴墓→20号横穴墓→19号横穴墓、F2グループは22号横穴墓→23号横穴墓→24号横穴墓→49号横穴墓となる。Fグループは2類に分かれるが、グループ間の新旧関係は不明である。23号横穴墓の玄室から出土した、豊富な出土品からこのグループでの中心的な役割を果たした家族の墓であろうか。



図9 25～31号横穴墓

25～31号横穴墓の玄室からは、直刀と男性1体・女性1体・幼児1体の人骨が出土している。新旧関係は不明な点もあるが、G2で26号横穴墓→28号横穴墓→27号横穴墓、G3は31号横穴墓→30号横穴墓→29号横穴墓と考えられる。

Hグループ：32～34・50号横穴墓（西群 図8）

32～34・50号横穴墓の4基から構成され、6号排土置場を有する。H1の32号横穴墓、H2の33・50号横穴墓、H3の34号横穴墓となる。50号横穴墓は、形態・規模から小横穴の改葬墓と考えられる。

H1とH3が各1基で、H2では33号横穴墓→50号横穴墓への変遷が考えられる。配置から考えると、33号横穴墓がもっとも古い可能性がある。

Iグループ：35～37号横穴墓（西群 図8・10・11）

35～37号横穴墓の3基から構成され、墓前域と7号排土置場を共有する。墓前域や7号排土置場の土層を検討すると、36号横穴墓（古）→37号横穴墓（中）→35号横穴墓（新）への変遷が推定された。



図10 35～37号横穴墓



図11 37号横穴墓玄室内遺物出土状況

特に 37 号横穴墓は、玄室内から直刀や馬具・女性 1 体の人骨など豊富な埋葬品に驚かされる。馬具の一具がそろって出土している。馬具は、鉄地金銅張棘葉形鏡板付轡・締金具・鉄地金銅張・辻金具・飾革帯金具などである。また、この玄室では、出土した状況から先に直刀と馬具類と共に埋葬された男性がいて、後に勾玉類を伴う女性を追葬したことが明らかになった。このため、豊富な出土品からこのグループでの中心的な役割を果たした家族の墓であろうか。



図 12 38・39・52・53 号横穴墓

このため、豊富な出土品からこのグループでの中心的な役割を果たした家族の墓であろうか。

Jグループ：38・39・52・53 号横穴墓 (西群 図8・12)

38・39・52・53 号横穴墓の 4 基から構成され、Kグループの 40～44・47 横穴墓と 8 号排土置場を共有している。38 号横穴墓からは直刀、39 号横穴墓からは勾玉・切子玉や女性 2 体の人骨が出土している。52・53 号横穴墓は、形態・規模から小横穴の改葬墓と考えられる。

新旧関係は横穴墓の配置や規模・構造を検討すると、39 号横穴墓→38・52・53 号横穴墓への変遷が考えられる。

Kグループ：40～44・47 号横穴墓 (西群 図8・13)

40～44・47 号横穴墓の 5 基から構成され、墓前域と 8 号排土置場を共有している。また、Jグループと 8 号排土置場を共有している。K 1 の 40～43・47 号横穴墓と K 2 の 44 号横穴墓に分かれる。41 号横穴墓からは青銅製釧と刀子、43 号横穴墓からは刀子が出土している。新旧関係は、40・44 号横穴墓→42・43・47 号横穴墓→44 号横穴墓への変遷が考えられる。しかし、墓前域と 8 号排土置場との新旧関係を堆積土の状況からは把握することができなかった。J・Kグループの計 10 基の横穴墓がそれほど時間差なく構築されたことを考えると、堆積土からその痕跡を明らかにすることは困難であろう。



図 13 40～44・47 号横穴墓

その痕跡を明らかにすることは困難であろう。

Lグループ：45・46・48 号横穴墓 (西群 図8・14)

本横穴群の中で、最も西端で発見された横穴群である。45・46・48 号横穴墓の 3 基から構成されている。45 号横穴墓は比較的長い墓前域を有し、北西側壁に 46・48 号横穴墓が配置されている。48 号横穴墓は、形態・規模から小横穴の改葬墓と考えられる。46 号横穴墓も規模や形態から 48 号横穴墓に類似する可能性がある。45 号横穴墓からは勾玉が出土している。



図 14 45・46・48 号横穴墓

新旧関係は、45 号横穴墓→46・48 号横穴墓への変遷が考えられる。

新旧関係は、45 号横穴墓→46・48 号横穴墓への変遷が考えられる。

表2 筑内古墳群（横穴墓）分類

分類	横穴墓 No.	類 型	墓前域	新 旧 関 係	性 格	玄 室	時 期
A1	1	Ⅲ D' 1?	○	12号(新)>1号(古)	●	鉄製品鏝・直刀、勾玉、錫釧	I(古)期
	12	Ⅲ A' 1			—	—	Ⅲ(新)期
A2	2	Ⅲ I 1	○	3・55号>2号	●	土師器杯、鉄製品刀子	I(古)期
	3	Ⅲ C' 3?			小横穴(?)	—	Ⅲ(新)期
	55	Ⅳ G 3			小横穴(改葬)		
B1	4	Ⅳ G 3?	○	—	—	—	I(古)期
	5	Ⅲ E 1?			●	—	Ⅱ(中)期
B2	6	Ⅱ A' 1	○	6号>5号(中?)	●	鉄製品直刀・鉄鏃、勾玉、錫釧	Ⅲ(新)期
	51	Ⅳ G 4			—	小横穴(改葬)	
C1	7	Ⅲ B' ?5	○	7・8号>9号	—	—	Ⅲ(新)期
	8	Ⅲ C 1			—	鉄鏃	
	9	Ⅱ D 1			●	人骨	
C2	10	Ⅱ A' 1	○	10号>9号	●	—	I(古)期
	11	Ⅳ G 3			11号>10号		小横穴(改葬)
D	13	Ⅱ F 2	○	54号>13・14号	●	—	I(古)期
	14	Ⅳ G?3?			—		I(古)期
	54	Ⅴ J 5			小横穴(改葬)		Ⅲ(新)期
E	15	Ⅱ A' 1?	○	15号>16号	—	土師器杯	Ⅲ(新)期
	16	Ⅱ D 1			●	人骨	Ⅱ(中)期
	17	Ⅳ G 3			—	人骨	Ⅲ(新)期
	18	Ⅰ A 1			●	鉄製品刀子、人骨	I(古)期
F1	19	Ⅲ E' ?5	○	19号>20号(中)>21号	—	—	I(古)期
	20	Ⅲ D 5			●	—	Ⅲ(新)期
	21	Ⅱ D 1			—	滑石製紡錘車	Ⅱ(中)期?
F2	22	Ⅲ E' 1	○	49号>24号>23号>22号	●	—	I(古)期
	23	Ⅲ B' 1			●	鉄製品直刀、馬具	Ⅱ(中)期?
	24	Ⅲ D' ?1 a			—	—	Ⅲ(新)期
49	Ⅳ G 4	小横穴(改葬)					
G1	25	Ⅲ F 5	—	—	●	—	不 明
G2	26	Ⅱ A' 2	○	26号>28号>27号	●	須恵器蓋・高台杯、鉄製品直刀、人骨	Ⅲ(新)期
	27	Ⅲ A' 2			—	—	I(古)期
	28	Ⅴ A' 5			—	—	Ⅲ(新)期
G3	29	Ⅲ E 1b?	—	29号>30号>31号	●	—	Ⅲ(新)期
	30	Ⅲ F 5			●	—	I(古)期
	31	Ⅳ H 4			●	—	Ⅲ(新)期
H1	32	Ⅲ C' 5	—	—	●	—	Ⅲ(新)期
H2	33	Ⅱ A 1?	○	50号>33号	●	勾玉	I(古)期
	50	Ⅳ G 4?			小横穴(改葬)	—	Ⅲ(新)期
H3	34	Ⅲ F 5	—	—	●	—	Ⅲ(新)期
I	35	Ⅱ E' 1?	○	37号>35号>36号	—	—	Ⅱ(中)期
	36	Ⅲ B' 1?			●	金銅製耳環	I(古)期
	37	Ⅲ A' 2			●	鉄製品直刀、馬具、勾玉、人骨	Ⅲ(新)期
J	38	Ⅲ C' 2a	○	52・53号>38号>39号	—	勾玉	Ⅱ(中)期
	39	Ⅲ A' 1			●	勾玉、切子玉、人骨	I(古)期
	52	Ⅳ G' 4			小横穴(改葬)	—	Ⅲ(新)期
	53	Ⅳ G 4			—		
K1	40	Ⅲ D' 1?	○	47号>43号	●	—	I(古)期
	41	Ⅲ C 2			●	鉄製品刀子、青銅製釧	
	42	Ⅴ J 5			—	—	Ⅱ(中)期
	47	Ⅳ G' 3			—	—	
K2	43	Ⅳ G 4	—	44号>43号	●	—	Ⅲ(新)期
	44	Ⅲ I 1?			—	—	I(古)期
L	45	Ⅱ D' 1 a・b	○	46・48号>45号	●	勾玉	I(古)期
	46	Ⅳ H 5			—	—	Ⅲ(新)期
	48	Ⅴ J 5			小横穴(改葬)	—	

4 まとめ

近年の研究成果を踏まえて、白河市筑内古墳群を再検討していく。検出した横穴群は、分布から東群の横穴群は、A～Eグループの5類・20基と1～4号排土置場、西側のF～Lグループの5類・34基と5～8号排土置き場から構成されるD I層を囲むように横穴群が配置している。最初に構築される横穴墓（表2・性格の中で●印）からしだいに墓前域を拡張して他の横穴群を構築していく。墓前域を共通する横穴墓は樹枝状構造横穴墓と呼ばれる（註5）。

古墳時代の日本人の平均寿命は30～35歳前後と仮定して、出土品の検討から筑内古墳群は、6世紀後半から8世紀後半の約200年間にわたって造営している。本横穴群は、A～Lグループの12類が確認される。同時に横穴墓の造営が、最低3期と追葬や改葬を考慮すると、1横穴に対して第1世代から第3世代、そして横穴墓によっては第4・5世代の埋葬が考えられる。詳細な時期区分や性格について、確証が持てない部分もあるが、一つの推論と考えている。

さらに、小横穴は、改葬墓と推定すると、横穴群の中では、新しい時期と考えられる。また各グループの横穴墓は、墓前域堆積土の状況から、最低3～4時期の追葬を明らかにすることができた。同時に細分した各グループは家族的な墓＝横穴墓と規定すれば、家族の変遷を看取することができる。その中には、副葬品の豊富な横穴墓もあり、家族の中で中心的な人物が埋葬されたと考えられる。

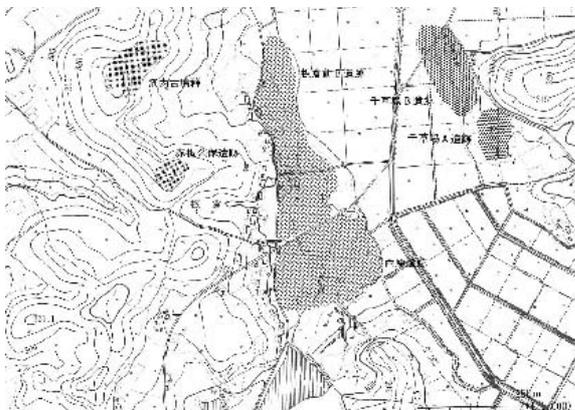


図15 筑内古墳群周辺の遺跡分布

1号墳の性格について

1号墳は埋葬施設が確認されないことに大きな特色がある。矢吹町弘法山古墳では、丘陵頂部から埋葬施設を持たない円墳と斜面から横穴墓が発見された。その中で、丘陵上から円墳上の高まりが確認され、調査の所見からこの墳丘と横穴墓は一帯のものとして考えられた。

筑内古墳群の被葬者たち（図15・16）

現在まで、矢武川流域から筑内古墳群の被葬者たちに関連する集落遺跡の発見例は数少ない。しかし、7世紀代の集落遺跡である玉川村高原遺跡や二本松市矢ノ戸遺跡（註6）から検討すると、河川に隣接した下位河岸段丘に立地する傾向が確認される。河川によって形成された低位河岸段丘上に立地したこれらの遺跡から考えると、筑内古墳群の南方に広がる下位段丘面に、当該時期の集落遺跡の存在が推定される。河川に面した段丘は、水利や地味の利便性から古来から早く開発が進んだ地域でもあり、7世紀代の集落遺跡はすでに破壊されていた可能性もある。横穴群調査時には、玄室の開口部からの景色が被葬者たちの生活の根源であり、死後

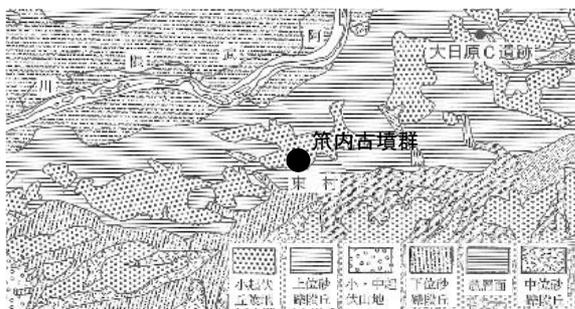


図16 筑内古墳群周辺の地形区分

現在まで、矢武川流域から筑内古墳群の被葬者たちに関連する集落遺跡の発見例は数少ない。しかし、7世紀代の集落遺跡である玉川村高原遺跡や二本松市矢ノ戸遺跡（註6）から検討すると、河川に隣接した下位河岸段丘に立地する傾向が確認される。河川によって形成された低位河岸段丘上に立地したこれらの遺跡から考えると、筑内古墳群の南方に広がる下位段丘面に、当該時期の集落遺跡の存在が推定される。河川に面した段丘は、水利や地味の利便性から古来から早く開発が進んだ地域でもあり、7世紀代の集落遺跡はすでに破壊されていた可能性もある。横穴群調査時には、玄室の開口部からの景色が被葬者たちの生活の根源であり、死後

もまた美田と子孫たちを見守っていたのであろう。同時に、この被葬者たちの集落遺跡の存在を確認するための鍵となる。

共有する墓前域を有する横穴墓の調査法について

表面調査で横穴群の存在を確認することはなかなか難しい。一般には開発途中か、開発の事前調査で発見される場合が多い。調査の方法としては、先行して横穴墓の土砂堆積状況を把握しておかなければならない。順序として、①重機（バックホー）で表土を剥ぐ。②土層観察用のベルト（畦）を残して手掘りで掘り込む。③玄室内の堆積土は、ふるいにかけて、土砂を選別する。④図面作成。墓前域の調査では、墓前祭祀に使用された土器類を細分し、樹枝状構造横穴墓はどの横穴墓に関連するかも把握することが重要である。

5 おわりに

『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告 39』は、平成7年度の国営総合農地開発事業の最終年度に発行された。昭和53（1978）年度の発掘調査から17年の歳月がすぎ、整理作業はほぼ終了していたが、未報告の遺構・遺物があった。平成7年度の調査は、当時の東村上野出島地区（現在は白河市）の部分調査であり、当初予定した調査の進捗が早まった。そのため、事業の最終年度を預かる調査担当者の一人として、未報告分の報告書刊行にこぎ着けなかった。なにより、当時の県教育庁文化課や東北農政局母畑開拓事業との連携・協力により発行した報告書である。

<註>

（註1）白河市内の横穴墓は、旧大信・東・表郷村を含めて14ヵ所が遺跡地図に登録されている。笹内古墳群を除いて、白河観音山横穴古墳（白河市：1972）・郭内横穴墓群（白河市郭内：1980）・深渡戸B横穴群（白河市表郷：1990）・的石山横穴墓群（白河市：1989）がある。（ ）は、調査年度を示す。

（註2）国営総合農地開発事業母畑地区は、福島県中通り地方の南部の郡山市・須賀川市・玉川村・東村及び中島村の2市1町3村を対象とした大規模な農地造成・ほ場整備事業である。発掘調査は、昭和51年度から平成7年度まで、83遺跡90地点について実施した。

（註3）福島県文化財センター白河館（まほろん）には、白河市笹内古墳群の中から小型な前方後円墳である2号墳を復元展示してある。また、解説文には当時の集落と古墳群との関係が理解できる案内板を掲示してある。

2号墳は、全長約17m・地表面からの高さ約200cmを測る。内部の主体は、玄室・玄門・羨道からなる。玄室は、半地下室の石室である。内部からは銅釧が出土している。

（註4）人骨の出土状況から、小横穴や副室と呼ばれた小規模な横穴墓は、改葬墓の可能性が高いことを指摘した（高橋 1994）。人骨の出土例は、深渡戸B横穴群（白河市表郷：1991）・的石山横穴墓群（白河市東：1979）などがある。福島県内には残念ながら、人骨の分析を通して家族や親族構造について比較・検討した報告はない。

（註5）樹枝状構造横穴は、「福島県における古墳と横穴」（佐久間 2010）で使用している。



図17 白河市笹内古墳群2号墳（復元）

(註6) 矢ノ戸遺跡は昭和49・50・51年度の発掘調査、高原遺跡は平成11年度の発掘調査である。特に高原遺跡の調査所見から7世紀の横穴群を造営した人々の集落が明らかになった。この遺跡の周辺には、矢吹町弘法山古墳や玉川村百人横穴群などの横穴群が確認される。矢武川流域では、図17の範囲に集落遺跡が埋没している可能性がある。「国営総合農地開発事業」の表面調査では、主に筑内古墳群から矢武川に向かって段丘面を中心に実施し、矢武川流域の沖積地は主に水田として利用されており、遺物の発見には到らなかった。現在は、盛土され水田・畑地として利用されており、まだ地下に古墳時代後期の集落遺跡が埋没している可能性は高い。

<引用・参考文献>

- 白河市教育委員会 1973 『白河市観音山横穴古墳群発掘調査概報』
福島県教育委員会 1975 「観音山横穴群」
福島県教育委員会 1975 「観音山北横穴群」
福島県教育委員会 1979 「筑内古墳群」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』
白河市教育委員会 1981 『郭内横穴墓群Ⅰ』
福島県教育委員会 1981 「矢ノ戸遺跡」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅳ』
白河市教育委員会 1990 『的石山横穴墓群』
表郷村教育委員会 1991 『深渡戸B横穴群発掘調査報告』
中島村教育委員会 1991 『蝦夷穴12号墳横穴墓調査報告』
高橋 信一 1994 「福島県内横穴墓における埋葬形態の検討」『しのぶ考古9』
福島県教育委員会 1996 「筑内古墳群」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告39』
福島県教育委員会 1996 『福島県遺跡地図』
池上 悟 2000 『日本の横穴墓』
福島県教育委員会 2000 「弘法山古墳」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告8』
福島県教育委員会 2000 「高原遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告11』
福島県教育委員会 2002 「高木遺跡」『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告2』
白河市 2004 『白河市史第1巻 通史編1 原始・古代・中世』
池上 悟 2004 『日本の横穴墓の形成と展開』
白河市教育委員会 2005 『観音山横穴墓群発掘調査報告書』
佐久間正明 2010 「福島県における古墳と横穴」 第15回関東・東北前方後円墳研究会